

弥生土器様式概念の形成と日本考古学

濱田延充

1. はじめに—現在における様式論—

日本考古学は海外の考古学と比較して理論の部分について遅れていると言われた時期があり(都出1995)、海外の理論考古学が紹介され、あるいは導入がはかられてきた。しかし、一方で日本の考古学における土器編年は、世界の中で最も精緻なものとなされ、日本考古学の成果のひとつとして評価されている。この土器編年を含めて、考古資料の整理や資料操作は決して無秩序に行われたのではなく、型式学や層位学的検討に基づくものである。特に、弥生土器研究においては、資料を個々の型式ではなく型式群として理解する「様式概念」が創出され、これを用いて編年作業や地域色の検討を通じて土器の製作や使用の問題が議論されている。私は、この様式概念について、考古学特に先史考古学における社会や文化を解明するための資料操作の方法として有効な概念であると同時に、日本考古学が世界に誇るべき考古理論であると評価している。

しかし、様式概念や様式論そのものが扱われた研究や、様式を活用した研究を目にすることが少なくなっている。これは、一つには1920~30年代に形成された様式概念が、その後十分な検討を経ないまま今日に至り、試行錯誤の中で手探りの状態で書かれた初期の論考たちが、私たちに難解な印象を与えているからかもしれない。

そこで、小論では現在、主として弥生土器研究の方法として使用されているこの様式概念あるいは様式論について整理を行いたい。私の「様式」あるいは考古学における土器研究に限定して使用する「土器様式」なる用語に対する立場は、これまでも説明を行ってきた(濱田1989・1996)。ここでは、主として様式概念が使用されてきた弥生土器研究史を整理しながら、この言葉が日本考古学あるいは弥生土器研究の中でどのような概念と考えられ、また使用されてきたかを整理しておきたい。

そもそも「様式」なる言葉は、一般的にはどのような意味をもっているのだろうか。『広辞苑』には「芸術作品・建築物などの形式的特徴を総合したもの。特定の時代・流派・作家など表現上の特性を示すもの。」と書かれている(新村編2007)。一般的には、白鳳様式やバロック様式など美術史や建築史などの用語として使用されることの多い分類概念である。日本考古学に型式学としてこの「様式」を持ち込み、現在に至るその概念を規定する

と同時に、弥生土器研究に活用したのは小林行雄である。

2. 小林行雄の弥生土器様式研究

小林行雄の様式概念やその形成過程、その後の弥生土器様式論の動態については、京都木曜クラブの初期の業績(京都木曜クラブ1992・1994・1995)や、伊丹徹による整理(伊丹1990)に詳しくまとめられている。これらによると、小林行雄の様式論は「弥生式土器における櫛目式文様の研究」「九州弥生式土器の一様式」「安満B類土器考」の中で概念規定の試行錯誤が行われた後、「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」において様式概念の説明が述べられている。この後、雑誌『考古学』の第4巻第8号で「先史考古学に於ける様式問題」が発表され、考古学研究における様式概念の使用の決意とその方法について明らかにされている。

京都木曜クラブ『考古学史研究』第1号の特集「小林行雄『先史考古学に於ける様式問題』を読む」の中では、論文成立の背景を含めて様々な検討が加えられ、解釈が試みられている。同書によると、小林は文学史学者のヨゼフ・ナドラーの『様式史の問題』から大胆な文章の引用を行いながら、考古資料を「様式」という概念で整理・分類し、歴史的な位置付けを行うことの必要性を説いている。また、当時の考古学における分類概念との比較を行うと同時に、日本考古学に科学的な分類方法を持ち込んだ中谷治宇二郎の様式概念について、一定の評価を与えながらその方法論の限界を指摘し、新たな方法論の提示を行っている(内田1992)。

「先史考古学に於ける様式問題」で方法論を提示した小林は、弥生土器研究において様式論を活用し、自身が案出した研究方法の実践を行う。すでに「先史考古学に於ける様式問題」作成時に、この様式概念を駆使した「遠賀川式土器研究」(「遠賀川系土器東漸形態研究」と再編され、没後発表)がまとめられていた。

その後、森本六爾と共編の『弥生式土器聚成図録』と、彼自身が調査に携わり資料整理を担当した奈良県唐古遺跡(現、田原本町唐古・鍵遺跡)の発掘調査報告書である『大和唐古弥生式遺跡の研究』で、土器様式論を駆使した弥生土器研究が結実する。前者は東京考古学会の同志を動員して日本各地の弥生土器の実測図を作成・集成し、それを編年して時間的に位置づけるという企画で、共編者の森本の没後は小林が編集及び「解説編」の執筆を行い、様式概念に基づいて現在の弥生土器研究の基礎となる各地域の編年を行っている。一方、後者では、一つの豎穴から一緒に発見される多数の弥生土器をはじめとする資料に恵まれ、それらを利用して出土土器を五つの土器様式に編年した。両者の作業は並行して進められており、それまでに蓄積されていた小林の弥生土器研究の成果が唐古遺跡出土土

器の整理の基盤となっただけでなく、唐古遺跡調査における編年の見通しが『弥生式土器聚成図録』の畿内地方の編年に大きな影響を与えたことは、伊藤純が指摘するように報告書刊行前(発掘調査終了直後)の唐古遺跡出土土器が34点も『弥生式土器聚成図録』に掲載されていることから明らかである(伊藤1995)。小林は前者の「解説編」の「後説」に弥生土器研究の総括を述べて、第二次世界大戦後は弥生時代研究から離れ、三角縁神獣鏡をはじめとする古墳時代の資料に研究対象が移っていった。

3. 小林行雄の様式概念の内容

小林行雄の様式論は「先史考古学に於ける様式問題」では、全ての時代・種類の考古資料の研究での様式の使用を意図したかのように論が展開されている。しかし、実際に小林が様式論を使用したのは、弥生土器研究に留まっている。上記論文が発表された『考古学』第4巻第8号の同じ誌上には、同じく小林による「弥生土器様式研究の前に」が掲載されており、弥生土器を活用した弥生時代研究の方法として様式概念が創出されたためである。

小林の様式論は、日本で初めての科学的な考古資料(遺物)の分類方法として「型式」「形式」「様式」という三つの分類概念を用意した中谷治宇二郎の分類概念(中谷1929)の用語を使用したものである。^(注1)中谷は、生物学における分類方法を考古学に持ち込み、発掘調査に依拠しない純粋な遺物の資料操作による客観的・科学的な分類の方法の確立を試み^(注2)た。中谷は、「形式(form)」を生物学の種(Species)に匹敵し変化の様子を追いかけても決して相互に形が連絡することのない遺物のまとまり、「型式(type)」を形式を細分したものの、さらに型式に属する各個体の型(pattern)を観察することによってまとめられる個体群(group)に共有される型を「様式(style)」と規定した。このようにして分類された様式の時間的あるいは空間的分布を検討することによって、中谷は文化やその推移を解明する手掛かりにしようとした。

中谷の分類方法では「形式の設定」「型式の設定」「様式の設定」という順序で、型式を細分したものと^(注3)して様式が表現されている。この中谷の分類方法について、小林は次の2点の疑問を唱えた。第1点は、当初に行う「形式の設定」が主観的な恣意性を含んだものであり、特に土器においては「椀形、皿形、鉢形と、名前は今日の用具をそのまま使って勝手に区別はしているが、どこにそれ程はっきり区別があるのかわからない。」と中谷自身も述べているように(中谷1929)、土器における形式の設定は困難で、中谷の分類法が土器研究特に小林が進めていた弥生土器研究に有効ではないことである(小林1933c)。

第2点は、「形式によって分ち、型式によってさらに細分せられた『様式』という段階

に於いて与えられるものがありとすれば、それは文化の活発な表現としての『様式』の一断片－既に全体との有機的関連の糸を切断された一断片に終るのではなからうか。」と述べているように、細分の結果導き出された様式は単なる分類単位となってしまう、そこから文化を語ることは論理の飛躍となり、小林がめざす文化の解明の道具足りえないことである(小林1932d)。特に、弥生土器の実態を複数の土器型式の集合(土器型式群)であること明らかにしつつあった小林にとって、「先ず土器を形式主義的に鉢形と壺形とに分つてしまえば、たとえ鉢形土器の様式変化は見出すことが出来るとしても、一の鉢形土器と一の壺形土器とを最も結びつけている文化的関連は失われる。」と述べているように、中谷の細分によって求められた様式概念は、決して容認できるものではなかった。

こうして、小林は「分類の一段階の名称に採用された為に単なる『語』のみになってしまった『様式』という語に、正しい『様式概念』に基づく意味を再び与えようというのが、自分の立場である。」(小林1933a)と宣言し、中谷の概念とは異なる型式群としての様式概念を用意する。さらに、その手続きについて、一つの遺跡から一緒に出土した遺物群を「様式」として理解し、その遺物を細分して「型式」を設定し、複数の遺跡の遺物群(型式群)を比較して真なる「様式」を求めるという方法を提示している(小林1939)。

小林の様式論では、最初に出土状況という事実をもってくることにより中谷様式論の問題を克服し、「様式」を考古学における有効な理論・方法論として活用しようとする意図が感じられる。小林は、中谷の分類方法としての様式概念の科学性に魅力を感じ、これを自身の考古学研究、とくに取り組んでいた弥生土器研究に導入を試みる中で、中谷の様式論では十分な成果が得られない事を認識し、新たな様式論を提示したと考えられる。

小林は「様式」の設定にあたり、「斉一性(概念)」と「個性原理」の存在を力説している。「斉一性」については「遺物群の秩序は様式概念によって統一せられる。様式は事物と共に生起し、事物の在るところに普く存在する統一的な斉一性の概念である。」「事物のうちにある一つの約束であり、型である。」、さらに「個性原理」については「それが一の様式であるといふことは、他者に対して一者であるという認識によっている。」「様式の認識はその実在の根拠の自主性にもかかわらず、常に様式と様式を分かつこと、他者から区別せられることによって始められるのである。」と定義している(小林1939)。遺物の型式群としての集合(グループ)となる様式を考えるうえで、様式内部には「斉一性」が求められ、様式外部つまり他の様式との関係においては「個性原理」が求められるのは、分類概念としては当然と理解できる。

4. 弥生土器様式論研究のその後

一連の弥生土器研究の集大成として企画され、小林行雄自らが編集・執筆した『弥生式土器聚成図録』が完成し、第二次世界大戦後、小林は弥生時代研究を離れ、三角縁神獸鏡をはじめとした古墳時代の研究に転向し、弥生土器の研究は後継者に委ねられることとなった。

東京考古学会の同人でもあった杉原荘介は、「概念の説明としては明らかに不徹底なものであり、この考えにおいてはまたその矛盾は永久に克服されることもないであろう」と小林の様式概念を批判し、独自の「型式」「形態」「様相」という概念を用意した(杉原1943)。しかし、彼の方法論は発表後も他の研究者に採用されず、一般的にならなかった。

1960年代以降、小林行雄の業績を引き継いで弥生土器研究、とくに近畿地方での研究をリードしたのは佐原真である。佐原は『弥生式土器聚成図録』の増補改訂版として企画された『弥生式土器集成』本編で「畿内地方」を執筆し、すでに発表していた小林の「第一様式」の古・中・新の三段階区分案のほかに、「第三様式」の古・新の二段階区分を発表した(佐原1964)。また、佐原は地域性の問題にも積極的に発言し、「第二様式」での地域型甕の設定や、「第三様式」における旧国単位での土器の地域性を明らかにしている。

ただし、佐原自身は「様式論」そのものについて検討を行わず、編年においては小林の五様式区分の枠組みを堅持し、新たな編年様式の設定ではなく「段階」という言葉を使用して細分を行っている。地域色の問題についても、畿内地方内部における土器の差異を指摘しながら地域様式の設定は行わず、小林の土器様式の枠組みの変更について、あえて避けているような印象を与える。

都出比呂志は、1970年代以降、小林の業績を引き継いで精度の高い弥生土器研究を行っている。都出も、小林が設定した「畿内第五様式」の編年細分を行っている(都出1974)。畿内第V様式に後続する「庄内式」および「布留式」も含めて七つの時期に細分しているが、「～式」と命名しこれを「編年小期」として理解している。都出の細分案は、『弥生式土器集成』での西ノ辻遺跡諸地点出土資料の小林の記述(小林1958)を踏まえてのことと推測されるが、小林の弥生土器研究での最後の仕事となる西ノ辻諸様式の設定をほぼ容認する形で、畿内第五様式の細分小様式を設定しているのは興味深い。

また、都出は小林の土器様式論のなかに「時間的様式差」と「地域的様式差」があることを指摘し、佐原の地域色の研究の様式論的な解釈を試みている(都出1983)。さらに、地域色の解釈の中で、土器型式の分布圏の問題に触れ、杉原荘介の型式論を批判すると同時に、海外における土器の型式学的分析方法を紹介している(都出1989)。しかし、ここでも都出は小林の様式概念そのものには触れていない。

伊丹徹がすでに指摘しているように(伊丹1990)、佐原および都出が小林以降の弥生土器研究を深化させたのは事実であるが、両氏とも「様式論」あるいは「様式概念」の本質にはあえて触れておらず、「様式」という言葉を上手に利用しながら分析・研究を進めたことがうかがわれる。

一方、新たな様式設定の手続きを提示した研究者として、寺沢薫をあげておきたい。寺沢は、小林の「まず一括資料を様式として理解する」様式設定の手続きに疑義を表明し、その正統な支持者である森岡秀人の行った良質な一括資料の追求を批判している(寺沢1980)。その上で、様式設定の手続きとして「形式の設定」「型式の設定」「様式の設定」の三段階を示し、ジェームズ・ディーツの分析手法(Deetz1967)を引用して形式設定の手法を提示している^(註5)。

この寺沢の様式設定の手続きは、まさに前章で示した中谷治宇二郎の様式分類の方法(中谷1932)と同じ手順であり、寺沢は中谷の分類方法の再評価を意図したのではないかと推察される^(註6)。寺沢は、小林が批判した中谷様式論の「形式の設定」の恣意性の部分に、ディーツの手法を利用して客観性を与えることで、その復活を目論んだと言えよう。

寺沢の様式論は、中谷分類法の改訂版として、一括資料に頼らない純型式学的な様式の設定を目指したものである。発掘調査の精粗や調査担当者の主観の影響が及ぶ遺物の出土状況の評価の部分に頼らざるを得ない一括資料の利用を排除し、より客観的・科学的な方法論として様式論を新たに構築しようとしたと理解できる。寺沢は、この方法論を駆使し畿内第五様式の編年細別を行っている。しかし、高杯や甕にみられる形式と型式の混乱や、壺類にみられる形式の乱立により、全体の編年や各小様式の内容の理解を困難にしており、必ずしも有効な編年となっていない。

上記の寺沢の様式論の問題点は、実は寺沢が拠り所とした中谷の分類法について小林が指摘した問題点と見事に一致する。つまり、寺沢は中谷の分類法の修正を意図したにも関わらず、結局その問題点を克服できなかつたと評価できよう。それは、小林が批判した中谷の分類法の最大の問題点である様式設定の手続き(順序)の、形式→型式→様式を採用したためだと考えられる。

5. まとめにかえて～弥生土器様式論の未来～

土器研究あるいは弥生土器の研究として、土器様式という言葉や概念が利用されることは少なくなっている。近畿地方の弥生土器研究においても、編年研究に「～様式」として利用される以外は、様式そのものの議論や様式を駆使した研究も認められない。しかし、土器の製作や使用を研究する際に、型式群という単位として理解する様式論は、土器研究

を時代・社会・文化を解明するための道具あるいは方法として、現在においても十分に魅力的な概念と考えている。私はこれまでに、弥生時代前期の「遠賀川式土器様式」を利用して土器の製作・使用の観点から弥生文化の開始や縄文時代から弥生時代への変化の検討を行った(濱田2000)し、弥生時代中期の「生駒西麓土器様式」を活用した土器の地域色や編年作業から製作技術の変化や地域間交流の問題を検討した(濱田1990・1993)。また、弥生時代中期から後期への変化を「畿内第V様式」の成立とその広域な分布圏の成立の中で解明したいと思っている(濱田2001)。

様式論あるいは土器様式論は、弥生土器研究が弥生時代あるいは弥生時代社会解明の一翼を担っていくために、その方法論として今なお有用な概念であると考えている。ただし、様式論そのものは、小林行雄の概念規定以後、その整理や検討は十分に行われなまま現在に至っているといえよう。小林が様式概念を創出した1930年代から3/4世紀を越えて、膨大な資料の蓄積をはじめとして考古学的な環境も大きく変化しており、多くの問題点が指摘されるように、小林様式論をそのまま利用するのは困難かもしれない。一方、前章で指摘したように小林の後継者とされる研究者によって様式概念の検討はほとんどされなくなり、近年では小林様式論を神格化したような解釈論が発表されているに過ぎない。こうした中で、今こそ様式概念の整備が求められ、いわゆる「使える様式論」の確立こそ必要であると感じる。

(はまだ・のぶみつ=寝屋川市教育委員会)

注1 小林が、中谷の分類概念に大きな影響を受けたことは、刊行後絶版となっていた中谷の『日本石器時代提要』の復刊に尽力したこと、さらにこの復刊本『校訂日本石器時代提要』には、補遺として小林自身が「土器の編年的研究」という文章を執筆していることから明らかである。なお、この文章は初版刊行以降に研究が進展して大きな成果を得つつあった縄文土器編年研究についての紹介とコメントであり、小林の縄文土器編年研究についてのリアルタイムでの立場を知ることのできる数少ない文献と思われる。

注2 中谷治宇二郎の業績と生涯については、以下の文献を参考にした。

高村公之「日本における様式論の創始者 中谷治宇二郎」『古代文化』第48巻6号 1996
西脇対名夫「中谷治宇二郎の反型式学」『考古学の源流』木村剛朗さん追悼論集 2009

注3 中谷の分類法は、「形式」を設定して資料の収集を行い、収集した資料を分類して「型式」を設定し、この型式に属する個体の諸特徴からさらに分類し「様式」を設定するという方法である。中谷の形式概念は「生物学の種(Species)の如く」(中谷1929)と述べられており、また実際の論考で注口土器や石匙が取り上げられていることから、現在私たちが便宜的に使用する各遺物の名称が相当すると思われる。弥生土器研究では、壺・甕・高杯といった「器種」

に近いものであろう。また、中谷の型式概念は小林以降の弥生土器研究で使用する「形式」に、様式概念はさらに細分された「型式」に概ね該当すると考えられる。小林が、中谷の方法について「型式分類と様式分類との混同」(小林1933a)と評したのは、その意味と思われる。

注4 小林行雄の著作の引用は、『小林行雄考古学選集』第1巻(真陽社 2005年)による。

注5 寺沢はDeetzの“attributes”“factemes”を、それぞれ「機能素」「形態素」と訳しているが、後日刊行された邦訳(関訳1988)では「用途因子」「形態因子」となっている。

注6 ただし、寺沢の使用形式・型式・様式の諸概念は、中谷のそれではなく、小林のものを使用している。

参考文献

伊丹徹「様式論と関東」(『神奈川考古』第26号)1990

伊藤純「小林行雄と唐古池の発掘」(『考古学史研究』第4号 京都木曜クラブ)1995

内田好昭「『先史考古学に於ける様式問題』の成立過程」(『考古学史研究』第1号 京都木曜クラブ)1992

京都木曜クラブ『考古学史研究』第1号【特集】小林行雄「先史考古学に於ける様式問題」を読む1992

『考古学史研究』第3号【特集】『弥生式土器聚成図録』の研究 1994

『考古学史研究』第4号【特集】『弥生式土器聚成図録』の研究 1995

小林行雄「弥生式土器における櫛目式文様の研究」(『考古学』第1巻第5・6号 東京考古学会)1930

「弥生式土器における櫛目式文様の研究(2)」(『考古学』第2巻第5・6号 東京考古学会)1931

「弥生式土器における櫛目式文様の研究(3)」(『考古学』第3巻第1号 東京考古学会)1932a

「九州弥生式土器の一様式」(『考古学』第3巻第2号 東京考古学会)1932b

「安満B類土器考」(『考古学』第3巻第4号 東京考古学会)1932c

「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」(『考古学』第3巻第5号 東京考古学会)1932d

「先史考古学に於ける様式問題」(『考古学』第4巻第8号 東京考古学会)1933a

「弥生式土器研究の前に」(『考古学』第4巻第8号 東京考古学会)1933b

「遠賀川系土器東漸形態の研究」1933c(『小林行雄考古学選集』第1巻 真陽社 2005に収録)

「様式」(『弥生式土器聚成図録』東京考古学会)1939

「大阪府枚岡市額田町西ノ辻I地点の土器」『弥生式土器集成』資料編1 1958

小林行雄・森本六爾『弥生式土器聚成図録』東京考古学会 1938・1939

佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2 1964

末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究

- 報告 第16冊) 1943
- 新村出編『広辞苑』第6版 岩波書店 2007
- 杉原荘介『原史学序論』小宮山書店 1943
- 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－」(『考古学研究』第64巻1号) 1974
- 「弥生土器における地域色の性格」(『信濃』第35巻4号) 1983
- 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 1989
- 「日本考古学の国際化の前提」(『展望考古学』考古学研究会) 1995
- 寺沢薫「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」(『奈良市六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所) 1980
- 中谷治宇二郎『日本石器時代提要』岡書院 1929 (梅原末治校『校訂日本石器時代提要』甲鳥書院 1943)
- 濱田延充「編年作業における弥生土器様式論の諸問題」(『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 「弥生時代中期におけるいわゆる生駒西麓産土器の製作地」(『京都府埋蔵文化財情報』第35号 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 「生駒西麓第三・IV様式の編年」(『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第2集) 1993
- 「弥生土器様式の空間概念」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 「遠賀川式土器の様式構造」(『突帯文と遠賀川』土器持ち寄り会) 2000
- 「畿内第四様式の実像」(『ヒストリア』第175号 大阪歴史学会) 2001
- 森本六爾「弥生式土器に於ける二者」(『考古学』第5巻第1号 東京考古学会) 1934
- Deetz, James『Invitation to Archaeology』1967 (関俊彦訳『考古学への招待』雄山閣 1988)

謝辞

小論の作成にあたって、文献探索について喜谷美宣・深澤芳樹両氏のお手を煩わせた。また、小論執筆中の2010年6～7月に、内視鏡検査で発見された大腸ポリープの切除のために大阪大学附属病院に手術入院し、退院後も腸閉塞を発症して彩都友絺会病院に再入院し、治療のため二ヶ月近い入院生活を送ることとなった。治療を担当された大阪大学附属病院下部消化器外科の竹政伊知朗・門田和之両先生、担当看護師の小川美穂さんをはじめとする西10階病棟看護スタッフの皆さんおよび、彩都友絺会病院の林太郎先生、5階病棟看護スタッフの皆さんには大変お世話になったほか、池田保信さんをはじめとする近畿弥生の会世話人や先輩・友人の皆さんからは励ましの言葉やメールをいただいた。末筆となるが、記してお礼申しあげたい。

